

## 「我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の授業実践例」

- ① 「我が国」の伝統音楽の実践例
- ② 鑑賞（魅力に迫るために体験活動を取り入れている）
- ③ 第3学年
- ④ 3時間
- ⑤ 雅楽に親しもう
- ⑥ 雅楽「越天楽」
- ⑦ ギター、ウクレレ、三味線、三線、箏、篠笛、和太鼓など  
上記記載の楽器をレンタルし、全校で取り組んでいる。今年度はギター、次年度は三味線、次の年は箏などというように楽器を変えながら取り組んでいる。

### ⑧ 実践例

#### I ねらい

1. 雅楽の曲想と音楽の構造との関わりや音楽の特徴とその背景となる文化や歴史との関わりを理解することができる。（知識及び技能）
2. 雅楽で使用される楽器の音色やテクスチャなどを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるとともに、演奏に対する評価とその根拠や、生活や社会における雅楽の意味や役割について考え、よさや美しさを味わって聴くことができる。（思考力、判断力、表現力等）
3. 雅楽の演奏や使用されている楽器の特徴に関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。（学びに向かう力、人間性等）

#### II 指導にあたって

##### 1. 生徒観

本学級の生徒は、雅楽の音を聴くことは初めてではない。1年の時にヴィヴァルディの「春」を鑑賞した際に、「西洋の春」と「日本の春」を比較し、春らしさを感じる点について学習している。初めはこれまであまり意識していなかった雅楽の音色に戸惑いながらも、「笛の音色から桜の花びらが舞っている神社にいるような感じがする」などと、自身が感じ取ったイメージと、音楽を形づくっている要素を関わらせることを楽しみながら学習している生徒が多かった。しかしながら、このような日本の伝統的な音楽である雅楽に対して興味があるかについて尋ねたところ、ほとんどの生徒が「興味がない」「つまらない」と回答している。理由について尋ねてみると「変化がないから眠くなる」「同じような雰囲気が続くから」と答えた生徒が多かった。

鑑賞領域の学習については、各学年に2回題材を設定して取り組んでいる。中学1年の時にヴィヴァルディの「春」の他にシューベルトの「魔王」、2年の時にフーガト短調、舞台芸術としてオペラと歌舞伎、3年の前期は「ブルタバ」を鑑賞し、音楽のよさや情景描写の美しさを学習してきた。それらの鑑賞の授業に対するアンケートをとったところ、「好きだ」、「どちらかといえば好きだ」と答えた生徒は8割、「嫌いだ」、「どちらかといえば嫌いだ」と答えた生徒は2割だった。その理由について見てみると、好きだと答えている生徒の多くは、音楽をじっくり聴くことで、今まで気付かなかった新しい発見があった時に面白さを感じると答えている。嫌いだと答えている生徒は、自分の好みの音楽ではないからとか、昔の音楽を聴く意味がわからないと答えている。なぜその音楽からよさや魅力を考えなければならないのかという必要感を見いだせないでいるのではないかと考える。

以上のような現状を踏まえて、本題材では知識や技能、経験の生かし所を見いだす力に意識を向け、音楽のよさや美しさを味わって聴く力を育てていきたい。

## 2. 教材観

雅楽は1300年の歴史を持ち、日本の古典音楽として、また世界の古典音楽として外国でも非常に高く評価されている。日本古来の儀式音楽や舞踊などと、仏教伝来の飛鳥時代から平安時代初めにかけての400年あまりの間に、中国大陸や朝鮮半島から伝えられた音楽や舞が、平安時代に日本独自の様式に整えられた音楽である。雅楽には「歌、舞」「舞楽」「管絃」「歌物」があり、演奏は、皇室や寺社などにおいて盛んに演奏されてきた。明治時代に宮内庁式部職楽部が創設され雅楽を伝承しているが、ここ山形県においても、河北町の谷地八幡宮の林家舞楽が国の重要無形民俗文化財に指定されている。林家舞楽は早くに地方に下ったため、平安中期以降の楽制改革（日本化）の影響が少なく、よりシルクロードの面影をとどめていると評されている。また、山形市においても六榎八幡宮の宮司が代表を務める祭祀楽研究会が雅楽を伝承しており、自分たちの生活の身近なところで、1300年もの間ほとんど形を変えず、脈々と受け継がれてきた音楽があるということを考えて愛着を持たずにはいられない。

このような芸術を鑑賞することは、人々の暮らしとともに音楽文化があり、そのことによってさまざまな特徴をもつ音楽が存在していることを理解することにつながる。また、その理解は、自分の音楽に対する価値観を広げ、音楽文化の豊かさに気づき、尊重することにつながるができるであろうと期待している。

## 3. 指導観 ～目指す生徒の姿に近付けるために～

本題材での授業における、資質・能力を発揮している生徒の姿を、以下のように考えている。

雅楽に関わる知識を得たり生かしたりしながら、雅楽のよさや美しさを味わって聴いている。

### (1) 本題材で育成を目指す資質・能力

本題材では「平安時代の音楽が今も受け継がれているのはなぜか」を、題材を貫く課題として設定し進めていく。雅楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにするためには、「曲想と音楽の構造との関わり (B鑑賞イ (ア))」「音楽の特徴とその背景となる文化や歴史 (B鑑賞イ (イ))」を理解することが必要である。普段あまり聞きなれない楽器の音色がどのような仕組みで音が出ているのか、それぞれの楽器の音色が重なるとどのような雰囲気になるのかについて理解することが、曲に対する評価と根拠について考えたり、生活や社会における雅楽の意味や役割について考えたりすることにつながり、雅楽をより深く味わったり、身近に感じたりできるようになる。このような活動を通して、「音楽を形づくっている要素の働きを知覚したことと、音楽のよさや美しさなどを感受したこととを関連付ける力」を高めることができると考えている。そして、この題材を通じて得たものは、特に全教科共通で重視して育む資質・能力「知識や技能、経験の生かし所を見いだす力」を伸ばすことにつながると考える。

### (2) 手立て

学習を進めるにあたり、特に以下の点に留意する。

- ・雅楽で使用されている楽器の音色を理解させるために、鑑賞教材を視聴する他に、ゲストティーチャーによる演奏を聴き、楽器に触れ音を出してみる場を設ける。

## Ⅲ 学習計画 (3時間計画)

### 【第1時】

◆雅楽の曲想と音楽の構造との関わりや音楽の特徴とその背景となる文化や歴史との関わりを理解する。

○雅楽を鑑賞するとともに、雅楽の特徴や歴史、山形県とのつながりについて調べ、学習プリントにまとめる。

【第2時（本時）】

◆雅楽で使用される楽器の音色やテクスチャなどを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考える。

○雅楽で使用されている楽器の音色を理解するために、ゲストティーチャーによる演奏を聴き、楽器に触れ音を出してみる。

【第3時】

◆演奏に対する評価とその根拠や、生活や社会における雅楽の意味や役割について考え、よさや美しさを味わって聴く。

○生活や社会における雅楽の意味や役割について考えるために、「平安時代の音楽が今も受け継がれているのはなぜか」という課題について、雅楽の楽器の音色、特徴、歴史の3つの視点を組み合わせて学習プリントにまとめる。

IV 授業の実際

(1) 本時の導入について

当初は、本時の課題をつかむ前に、前時に各自が調べたことを発表させ共有することで、課題をしっかりと捉えられるのではないかと考えていた。しかし、前時の調べ学習が思いのほか順調に進み、前時のうちに他者と交流することができたため、本時ではパワーポイントを使用して、以下の手順で課題提示を行う形に変更した。

<p>友人から作成依頼された、結婚式で上映するムービー この写真に合うBGM、あなただったらどれ選ぶ？ A：花のワルツ/チャイコフスキー B：道/GREEN ISLAND C：雅楽「越天楽」</p> <p>→ Cの音楽って？ 聴いたことある？ ジャンルは？</p>	<p>平安時代の音楽が、今も、受け継がれているのは、なぜか？</p> <p>「雅楽」について調べ学習</p> <p>① 歴史 ② 種類 ③ 楽器 ④ 演奏される場面 ⑤ 地域とのかかわり</p>	<p>平安時代の音楽が今も受け継がれているのはなぜか？</p> <p>楽器に注目！</p>
<p>① 雅楽を学習する必要感をもたせるために、上記のような状況を設定した。</p>	<p>② 題材を貫く課題や、雅楽について調べた内容をふり返った。</p>	<p>③ 題材を通した課題に迫るために、楽器の音色に注目する時間であることを確認し、ゲストティーチャー（祭祀楽研修会の方9名）を紹介した。</p>

結果として、本時の活動2の時間を確保することにつながることができた。また、授業前に演奏舞台を設営したため、生徒の興味関心が、指導者側が意図したことから外れてしまう可能性も回避できたのではないかと考えている。

(2) 本時の展開について

① 祭祀楽研修会の方による演奏を鑑賞（雅楽「越天楽」をノーカットで）約10分



### (3) 終末について

再度、祭祀楽研修会の方による演奏を鑑賞（「越天楽」をカットバージョンで）約5分最初に演奏を聴いた時の感じ方と、楽器体験後の感じ方に違いがないかどうか比較させた結果、生徒たちがどのようなことを記載したか、以下に示す。

- 一つ一つの楽器が別々に吹いていて、音もズレており、それがよさだと思っていたが、改めて聞いてみると、それぞれの楽器が互いに協力し合っているように感じた。
- 何回も同じ旋律をくり返しているのには、音の余韻を保つためなのではないかと思った。
- 楽器がどういうものか知らなかったのですが、ただ迫力があって気品のある演奏だと感じたが、体験した後だと、それぞれの楽器にある役割や奏者の方々が何を意識しているのかがわかった。
- それぞれの楽器の音に注目すると、音のかすれ具合やハードさが異なっており、それらの絡まり合いによって、奥行きが出てくるイメージに結びついていると実感した。
- 楽器の役割を知った上で演奏を聴くと、イメージする場面に変化がある。例えば竜笛は、まるで竜が天と地の狭間でうごめく場面が頭に浮かんだ。ただ単純に日本らしいと感じるのではなく、楽器の役割や奏者が意識していることを知ると、感じ方が大きく変わると思った。

### V 授業を終えて

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 導入の場面において、プレゼンテーション作成ソフトパワーポイントで課題提示したことにより、生徒たちは題材を貫く課題が設定された場面を振り返り、雅楽のそれぞれの楽器の音を体験したいという関心・意欲につながっていたと考える。
- 今回、雅楽のそれぞれの楽器の音を体験するために、ゲストティーチャーを招いた。普段は映像資料を用いてそれぞれの音を確認するのだが、それと比較してみると、雅楽の楽器の音に対する生徒の知覚・感受の質がより深くなっていると感じた。学習プリントを分析してみると、1回目の演奏よりも2回目の演奏の方が、それぞれの楽器のかすれ具合まで音色を捉える生徒、曲想を単なる「日本らしい」「気品がある」から「竜が天と地の狭間でうごめいているイメージ」などと感じ方を広げている生徒が多かった。
- 活動を振り返る場面において、再演奏をしていただく前に「音や音楽の捉え方を広げられるか」という鑑賞の視点を教師が指示したり、学習プリントに記載したりしていたことが有効な手立てであったと考えている。また、楽器に触れ、体験したからこそ聴き方が変わったと考えている。
- ▲今回は、グループで楽器を体験させた。スムーズに体験させるために作成したグループだったが、全ての楽器を体験する時間がなかったため、自分の興味・関心のある楽器に触れられなかったという生徒もいた。今後、グループをつくる必要があるか検討していきたい。